

〔論考〕

日蓮聖人研究管見―現在の視点から―

大平 宏 龍

目次

- 一、問題の所在
 - 二、日蓮遺文観の形成
 - 三、新展開の状況
 - 四、日蓮門下教学研究の目標
 - 五、結語
- 一、問題の所在

日蓮聖人研究（特にその教学思想研究）に於て、主たる資料は日蓮遺文である。無論、いわゆる「私集最要文註法華経」や曼荼羅本尊、又聖人に関わる諸文献並に紙背文書等も、今日では細かな研究が進められている。然し、多量の日蓮遺文が中心となることは言うまでもない。

この日蓮遺文について「祖書学」¹が構想されて以来、思想内容だけでなく書誌学・文献学の立場からの研究も進展してきた。²加えて、日本仏教の特色である天台本覚思想の研究が進み、それと日蓮遺文にみられる思想との関係が注意されるようになり、本覚思想の展開の整理の上に、日蓮遺文の真偽問題も考えられることとなった。³この点で、日蓮遺文のみならず日蓮観全般について、学問的成果をふまえつつ、当時における概観を与えてくれたのが、「講座日蓮」⁴全五巻であった。このような状況の上に、一般的な日蓮遺文観が形成されてきたのである。然し今はそこに、現代的視点から更に考えておかねばならない問題があるように思われるのである。

二、日蓮遺文観の形成

扱て、日蓮遺文の扱いに於て、特に注意すべきことのなかで、確実な遺文とそうでない遺文を分けて考えることが、おおむね一致した方法として意識されるようになったことが重要である。曾てその方向を受けて書かれたかと思われるのが、宮崎英修「日蓮遺文の考究」⁵で、日蓮遺文だけではなく、日蓮伝にも詳しい宮崎氏の好解説となっている。この場合、確実な日蓮遺文とは、日蓮親撰と考えられるもので、日蓮の真蹟の存在するもの、真蹟の一部（真蹟断簡）が伝わっているもの、曾て真蹟の存在したことが確実なもの（明治八年の大火まで身延に在したことが確認できるもの）、直弟子・孫弟子などの手写本で伝来事情が明らかなもの、等を意味する。無論、この場合も一〇〇%確実かとなれば問題の生ずることもあるが、大凡の基準として、研究者の間ではほぼ一致した見方であったように考える。

宮崎氏の記する所では

日蓮の遺文は(中略)いま、「昭利定本日蓮聖人遺文」によれば正編一・二卷に四三四篇、第三卷に八五篇、これに一九八真蹟断簡が挙げられ、その後、発刊の第四卷には新発見の真蹟断簡五十余が追加、合計七百六十余篇に及ぶ。

とし、続いて註法華経や御講聞書・御義口伝の解説があり、後の両書の偽書であることを述べたあと、なおこのほか、百二十余篇に及ぶ曼荼羅本尊、諸方に散在している未刊行の要文断簡、これは日蓮が書きとめた諸経論疏の要文抜萃で、一紙あるいは、二、三行の断簡として相当数のものが現存しているとされる。無論、現在から四十五年も前に書かれたこの概説は、細部の点では訂正を要する所があるとしても、日蓮遺文に対する視点は変わらないと考えられる。

言うまでもないことではあるが、思想研究という時、その資料となる文献のあり様が、自から研究法を要請する所があつて、例えば資料となる文献が研究対象者の自稿本、それは真蹟の場合もあれば、真蹟と同価値の場合もあるが、いずれにせよ親撰に疑いがないものであれば、直ちにその内容の正確な把握に向うこととなる。然るに資料とすべき文献が著者の自稿本ではなく、その写本あるいは転写本であれば、研究者は最も自稿本に近いテキストを求めて書誌的・文献的研究を行った上でテキストを定め、それについて内容研究を行うこととなる。中国古代理想研究や日本の中古天台思想研究に於ける困難さには、こうした手続きの難しさがあることが一つの問題であることは、周知の事であろう。

日本仏教思想史を考える上で、日蓮聖人の遺文の伝存の仕方は、前の宮崎氏の解説の如き状況であり、今に近い時代は別として、これは各宗祖師の場合に比して、特記すべき事であろう。

即ち、聖人の場合は、従来言われる「立正安国論」「開目抄」「観心本尊抄」の三大部、「撰時抄」「報恩抄」を

加えた五大部は元より「本尊抄」以降の「法華取要抄」「曾谷入道殿許御書」「本尊問答抄」「四信五品抄」等の、
教學を論ずる上で重要な遺文のほとんどが、親撰遺文と考えられる文献に属している。この事實は、日蓮遺文研
究が、まず書誌学的にみて親撰遺文圏に属する諸遺文を対象として思想的、思想的的研究を行い、一定の結論が
得られれば、それを以て中古の写本のみ存在する諸遺文に向うべきであるとする方法を是とすると思われる。

三、新展開の状況

平成二年、「シリーズ日蓮」が完結した。このシリーズは、意図された如く、日蓮門下各派の研究者が、論稿
を寄せて成立した点が画期的であったが、当面の遺文の扱いの点でも、注目すべき点があったと言えよう。

即ち、先の宮崎論文の遺文観を、更に詳論する形で、諸氏の論稿が示されている。注意すべきは、真蹟断簡が
続々と確認されていること⁽¹⁰⁾で、これは更に続くことと考えられる。

真蹟断簡や真筆曼荼羅については、中尾堯氏⁽¹¹⁾、寺尾英智氏の研究で、直接に研究した者しか知り得ない事実が
明らかに示され、その一般的報告もあつて、裨益する所が大きかったが、その一方で、大きな活動をされている
のが興風談所の諸氏である。常圓寺日蓮仏教研究所の都守基一氏と共に、その評価は佐藤博信氏「興風」と
「日蓮仏教研究」―新たな日蓮・日蓮宗研究の潮流―⁽¹²⁾に詳しいが、殊に日蓮門下にあつて、学問の土俵上に共
に登ることを拒否してきたかみえた、いわゆる富士門流に属する興風談所の諸氏が、自から学問の最先端で諸
論を展開される現状は、日蓮聖人研究の場が新展開していることの象徴であり、その原動力といえよう。綿密な
調査と周到な考証とIT機器を駆使した共同研究は多くの新事実を示してくれているが、当面の遺文観に関して

は、たとえば『定遺』番号二三九「曾谷殿御返事」（異称、焼米抄）は従来、中古の写本のみで伝来していたが、興風談所の発表で¹⁵は、真蹟断簡が発見されたということで、これがもし真実ならば、『曾谷殿御返事』は親撰遺文圏に入り、思想研究の第一級資料となる。

以上のように、日蓮遺文の研究では、まず書誌学的・文献学的に確実な遺文圏を見定め、それについて考察を行い、一定の結論が得られれば、それを以て中古の写本のみ存在する遺文圏に向う。これが常識的に考えられる方法である。¹⁶ 諸条件によって、当初から偽撰と確定しているものは論外である。

ところが近年、この常識に対する異論が出ている。¹⁷ それは、主として日本中古天台の思想、天台本覚思想の発展段階に対する観方が變つて、従来、日蓮遺文としてはまだ出ている筈はないと考えられた段階の天台本覚思想が、出ていて当然というようにみる論説が現れた事である。すなわち本覚思想の時代区分に従来の説に対する變更があり、日蓮遺文にみえる思想との時代的矛盾がなくなつたとみなされる故に、当該の遺文は親撰とすべきであるという議論である。

この議論は全面的に首肯できるであろうか。私には今少し考えておくべきことがあるように思われる。天台本覚思想のある段階の思想が、日蓮聖人よりも後の時代と考えられるならば、その段階の思想を述べる日蓮遺文は無論、偽撰の疑いが濃厚ということになる。しかし天台本覚思想の発展段階のみかたが變つて、日蓮聖人より前に措定されるならば、日蓮遺文中に同一思想が見出されても不思議ではない。だがそれは、日蓮遺文の真偽問題に関しては真とする場合の必要条件を充たしたということではあるが、十分条件ではないのではないか。

こういう場合に問題となる日蓮遺文とは、当然のこと写本のみで日蓮遺文として伝来したものを対象とするわけである。その日蓮遺文としての成立と伝来の経緯が明確であれば、そのみで親撰遺文と考えられる。「開目

抄」は現在、写本のみで伝えられているが、その真蹟原本が、佐渡塚原で著され、身延に明治八年まで確かに存在したことを疑う理由はない。ただ現在、「開目抄」の本文確定については問題となる所のあることは事実であるが、「開目抄」なる文献そのものが、日蓮聖人の親撰であることを疑う人はいないであろう。

当面の問題は、その成立と伝来の経緯が「開目抄」のように明確でない故に、その思想内容が問題となるのである。故に、これを日蓮聖人の親撰と断ずる為には、内容とは別の証拠が必要なのではないか。先述の「曾谷殿御返事」のように、その真蹟の一部分が確認されるか、日蓮聖人の直弟子の写本が存在するか、もしくは、自稿本の存在とその内容とが、何らかの形で明確に知られる場合は、十分条件となると考える。

天台本覚思想の研究の上からの伝日蓮遺文に対する判断は、偽とするも真とするも、いずれの場合でも学問上の仮説を前提とするものである。故に、ある仮説を前提とすれば、こういう思想が、この遺文にみえることも理解できるということであり、それは、あくまで思想を考える上でのことであつて、これを直ちに親撰とする、即ち日蓮聖人が著した原本が存在した、とするのは論理の飛躍ではなからうか。

日蓮遺文の資料としての特色は、前述の通り、確實なものと考えられる遺文圏に属するものの数が多く、しかも、その中に教学的に重要であると思われる遺文の大多数が含まれているという事実である。

故に、前問問題としてきた場合には、写本のみで伝えられた伝日蓮遺文中の思想に対して、親撰遺文中に同一の思想の有無を尋ね、その上で、改めて日蓮教学全体を再考する、その契機を与える資料となつたということに止めるべきではないか。内容に矛盾がないからという理由だけで、直ちに日蓮聖人が書いた実物があつたとするのは、果たして学問的であろうか。超一流の碩学の長年の研究成果に基づいて構築された中国古代思想の時代区分等が、考古学的発見によって一挙に瓦解したという事実を、私共は学問的方法論の上で、重く受け止めるべき

ではないであろうか。思想上の議論と、事物がどう存在したかの問題は深い関係にあるのは勿論であるが、学問的には一往別のこととして考究すべきであろうと考えるのである。

もしそれ、日蓮遺文中の真蹟遺文（ないし親撰遺文）のみによってその思想を考えるならば、日蓮の思想が貧しいとか弱いものになる故、写本のみで伝わる遺文を親撰とすべきであるというような考えがあるとすれば、それは本末転倒であり、学問的ではない。親撰遺文のみで日蓮思想を論ずる場合に、日蓮の思想が貧しく弱くなるという結論がもし出たとしても、それはそれで学問的結論としてそのまま認めるべきである。然し私は、親撰遺文のみで論じた場合も、日蓮聖人の思想は決して貧しくも弱くもないと考える。それに親撰遺文の思想的研究は、まだ不十分な所があるのではなからうか。主著の「観心本尊抄」にしても、私見では、これまでいわゆる「法開頭」の面ばかり強調されたようにみえるが、実は、そこに至る聖人の、人間存在をみつめての内実の御心の開陳の過程を拝さねばならないと考えるのである。⁽²⁰⁾ それによって、聖人の宗教世界の広さ・豊かさも更に実感されるのではないであろうか。

確実な日蓮遺文圏から導き出された考え方は、それが妥当なものであれば、たとえ写本のみ存在する遺文からは異なった結論が導かれたとしても、ゆらぐことはない。学問的に日蓮の思想を考えるとき、確実な資料に基づく結論を無視できないのは明らかであろう。無論、写本のみで伝わる遺文を最初から排除すべきであるという考えも学問的ではない。それを思想研究の資料として扱うには、資料に応じた方法が必要であるということである。

四、日蓮門下教学研究の目標

一般に日本仏教界に於ては、仏教学と宗学との関係が言われる場合がある、その場合の決まり文句は、仏教学は学問であり宗学はそうではない、なぜなら宗学は宗派の学であるから、というものである。一方で、高名な先学の言として「仏教学が栄えて仏教衰う」というような事も言われている。

現今、如上の様に日蓮研究の環境としては好ましい状況のもと、日蓮遺文の書誌的・文献的研究及び歴史（宗史）研究の面では、大きく前進したと言えるが、思想ないし教学研究の面では、個々の研究はあるものの、全体としてはあまり変化がないのではないか。一例として本尊論をみても、論者は様々であるが、その内容は旧態依然であり、統一の見解は未だに得られないのは遺憾である。これには、前述の学問と宗学との問題も関係しているよう。つまり一般には宗学と教学は同一視される向きがあるので、宗派の学ではなく一般的思想研究であることを意味する為、敢て「宗学」の語を避け「教学」の語を用いることが多い。それでも、客観的に描写しようとするれば、思想史的文脈の上に論じるとか、比較思想の方法によるとかの工夫が必要で、そうなれば古来論じられてきた伝統的法義などは無視あるいは軽視されることになりかねない。その上、日蓮門下には門流教学の伝統があるので、猶更難しい事情があるのである。

さて「インド学はエジプト学か」という中村元氏の提起²¹がある。これはインド学は過去の整理探求にすぎないのかということで、それは我々の仏教観にも関係することであり、恐らく日本の多くの仏教研究者の心中にある悩ましい問題であろう。これに対する対処は、これ又、それぞれの違いがあるであろう故に、唯一の解答などは出そうもない。然し、日蓮門下としては、日蓮聖人の宗教者として世にたたれた原点が「立正安国」の実現にあ

るとすれば、すくなくとも「立正安国論」の客観的研究のみでは聖人の眞の研究にはならないであろう。聖人教學のできるだけ正確な理解の上に、現在及び未来に於て望ましい考え方、あるべき姿を求めてゆくこと、これが我々の目標であろう。

私は、一般仏教學であれ、教學研究であれ、学問的であるか否かはその論文自体が示すことであり、如何に眞実に近いかが、そのみが唯一の価値である故に、一読すれば、それが学問的であるか否かは判断できると考える。

そこで私は、我々の場合、従来は教學＝宗學と考えがちであるが、それを明確に分けて考えたい。即ち、日蓮聖人の思想信仰を研究する場合、可能な限り公平・公正を心がけて、眞実に迫る場合を教學研究とし、宗學とは、それをもととして、現在及び将来にあり得べき、或は望ましい考え方・生き方を求めてゆく学問としたい。そうであれば、宗學とは、我々が最終的に宗とすべき学問の謂となる。こうみれば、宗學とは自宗自派のみを良しとする、いう所の宗派の學ではない。これからの人の生き方、民族や歴史や文化の違いを越えて、地球人として生きることを対象とした時、どのように考えるべきか、生きるべきか、それを求める学問であることとなる。

五、結語

以上、私などのように、このような大きな問題を提起する資格も能力も全くない者が、なぜこうしたことを考えるのかといえ、今日発言すべき場にある人が発言せず、問題と思われることが問題として取りあげられていない風潮があることに思い至ったからであり、無論、拙劣な提起であることは承知の上で大方の建設的な御意見を待つところである。

現在は学問の方法の中にも又問題があり、例せばパソコンの検索機能を利用して、資料を羅列すればそれでよしとするようにみえる風潮すらある。先人が命をかけて求法し、その結果残された成果は、たとえ一冊の書物であっても、我々は、それを熟読玩味して単なる知識の上だけのことではなく、できれば、少しでも自分の血とし肉とすべく、向かってゆくべきである。その上で、個々のチームなり主題なりを考え、やがて更に大きな捉え方をめざし、我々の生き方を考えていく、それが宗学ということであろう。私共の先師の荻谷日任・株橋日涌両人の御著をみれば、多言は要しない。

現今、日蓮聖人に関わる歴史的事実や、資料としての日蓮遺文などの個々の研究は進んでいるが、聖人自身の思想・信仰などについては、従来言われてきたことの上塗りの感があり、レトリックが目立つが、理屈が先に立つて事実を見定めていないと思われることが多い。今の祖書学の現状をふまえて、もう一度、確実な遺文をもとに聖人の真実に迫りたい。私の希いは、そのことにつきるのである。

注

- (1) 浅井要麟「祖書学概論」(同「日蓮聖人教学の研究」平楽寺書店、初版昭和二〇年(私見は昭和四四年第二刷))所収。
- (2) 浅井要麟編著「昭和新修日蓮聖人遺文全集」別巻、平楽寺書店、初版昭和九年初版(私見は昭和四一年第十刷)。及び鈴木一成「日蓮聖人遺文の文献学的研究」山喜房仏書林、昭和四〇年などが代表的なものである。
- (3) 田村芳朗「天台本覚思想と日蓮教学」(影山堯雄編「中世法華仏教の展開」平楽寺書店、昭和四九年所収)。
- (4) 監修坂本日深、編集田村芳朗・宮崎英修「講座日蓮」全五巻、春秋社、昭和四七年〜四八年。

- (5) 前掲注④講座「日蓮」第二巻所収。
- (6) 同前一〇八頁。
- (7) 同前一〇九頁。
- (8) 中国古代思想研究では、例えば津田左右吉「老子」の研究法について(「道家の思想と其の展開」岩波書店、昭和一四年)。「津田左右吉全集」第一三巻では「道家の思想とその展開」となっている。岩波書店、昭和三九年。なお其の後の考古学的発見による新展開の概説は、朝野裕一・湯浅邦弘編「諸子百家〈再発見〉掘り起こされる古代中国思想」岩波書店、平成一六年)など。
- 日本中古天台の本覚思想については、日本思想大系「天台本覚論」(岩波書店、昭和四八年)が、近代までの研究史も知られる最適の参考書である。
- (9) 小松邦彰等編著「シリーズ日蓮」全五巻、春秋社、平成二六年〜二七年。また現時点での書誌的情報については寺尾英智「日蓮聖人真蹟の形態と伝来」雄山閣出版、平成九年に詳しい。
- (10) 池田令道「日蓮遺文の編纂と刊行」(前掲注⑨「シリーズ日蓮」第二巻所収)。
- (11) 中尾堯「日蓮真蹟遺文と寺院文書」吉川弘文館、平成一四年。中尾堯「こ真蹟にふれる」日蓮宗新聞社、平成六年など。
- (12) 前掲注⑨寺尾英智「日蓮聖人真蹟の形態と伝来」。寺尾英智「日蓮信仰の歴史を探る」山喜房仏書林、平成二八年。
- (13) 中尾堯、寺尾英智等編「図説日蓮聖人と法華の至宝」全七巻、同朋社メディアプラン、平成二四年〜平成二六年など。
- (14) 佐藤博信「日蓮宗寺院の歴史と伝承」山喜房仏書林、平成二九年所収。
- (15) 興風談所「御書システム」(当時)平成二二年九月のコラム「幌延長應寺調査報告」。
- (16) 現在は誰もがこの方法をとれる環境になったことが大きいと考える。

日蓮聖人研究管見―現在の視点から―(大平宏龍)

(17) 末木文美士「日蓮の真偽未決遺文をめぐって」(勝呂信靜編「法華經の思想と展開」平楽寺書店、平成一三年)。

花野充道「天台本覚思想と日蓮教学」山喜房仏書林、平成二二年など。

(18) 真蹟断簡が存在しても、それは全体の一部分であり、その存在する箇所は親撰でも、伝存しない部分はどうか考えるのかの問題がある。「曾谷殿御返事」(焼米抄)は、唯一「五味主」のチームが見られる遺文として教学的には注目されるが、存在する断簡にはその箇所が含まれない。この点で「焼米抄」全体を親撰として扱い、文中の「五味主」を根拠とするのは問題ではないかという批判も提起されるかもしれない。

ここで考えねばならないのは、まずそれが間違ひなければ、真蹟断簡の存在は何らかの日蓮遺文の存在を示すということである。次に「焼米抄」と称される伝日蓮遺文が存在し、その一部分が別に伝わった真蹟断簡と一致したという事実をどう考えるかである。これはやはり、「焼米抄」全体が存在した可能性が高いことを示すものではなからうか。同じ文言を含む、全く別の日蓮遺文の存在は考えられるであろうか。もしその断簡の内容を知って全体を偽作すれば別であろうが、それはまず考えられない。ただ「法華取要抄」の場合のように、聖人の草案の一部であった可能性はあるであろう。

さて次の問題は、「五味主」のチームは「焼米抄」だけに出ているということである。しかし聖人教学における重要語句については、確実な遺文に一度だけというのは他にも複数ある。即ち「開目抄」の「まことの一念三千」、「粟権出界抄」の「第三の法門」、「四信五品抄」の「以信代慧」、「本尊抄」の「内証の寿量品」などがあり、「八品」(本門八品の意)は「本尊抄」のみに三回、「一大秘法」は「曾谷入道殿許御書」に二回のみ、等である。これらはその内容を、他の確実な遺文中の内容で説明できる。「五味主」の場合、その意味する所は解釈が一定しているわけではない。しかし私見では、隆師が一往は三五下種、再往は久遠下種の所を本とするとしたその解が妥当と思われる。故に「五味主」のチームをもとに日蓮遺文を解釈する場合は、当該箇所の真蹟はないが、確実な遺文と考えられる「焼米抄」が出典であることを示し、その上で内容を他の確実な遺文によって論じることとな

るであろう。ちなみに「三大秘法」は確実な遺文にチームは見られないが、他の遺文によって「宗旨の三秘」として使用されているのは周知の通りである。

(19) 前掲注⑧「諸子百家〈再発見〉掘り起こされる古代中国思想」。

(20) 大平宏龍「観心本尊抄」拜読私見―佐渡塚原と一谷の間―『桂林学叢』第二号、平成二十一年一月。また同「観心本尊抄」管見―なぜ、観心、本尊抄か―（法華宗興隆学林専門学校『法華宗教学研究発表大会第三〇回記念記録集〈法華教学／宗門史〉研究の現在―さらなる発展をめざして―』法華宗宗務院、平成三〇年所収）。

(21) 中村元「比較思想論」（岩波全書）岩波書店、昭和三五年、二九二頁。同「インド思想文化への視角」（西脇順三郎ほか『最終講義』実業之日本社、平成九年）三三四頁。

(22) 芹澤泰寛（寛哉また日耀）師の諸論考は、この点で示唆されることが多い。特に「宗学の将来について」『桂林学叢』第一〇号、昭和五三年三月、及び「宗学とは何か」『桂林学叢』第一五号、平成六年三月。

〔付記〕

拙稿は、興隆学林生が日蓮聖人遺文研究を行うに際して、何かの参考となればとまとめてみたものである。

（平成三十年十月十三日）

〈キーワード〉日蓮遺文 親撰 思想研究 教学 宗学

日蓮聖人研究管見―現在の視点から―（大平宏龍）